

## 座長のまとめ(10~13)

海野徳二(旭川医大耳鼻科)

この群の4演題はすべてネブライザーによるブロンカスマ・ベルナの使用例の報告であった。3題が慢性副鼻腔炎や鼻アレルギーに対する治療効果に関してであり、1題は犬を用いての実験結果の報告であった。

信州大学の和田らは、慢性副鼻腔炎患者に対し、注射液1mlを生食を用いて6mlに希釈し、8週以上に亘ってネブライザー療法を行い、自覚症状、他覚所見共に改善することを報告した。最も改善の程度が少なかったのはX線所見とのことであった。

宮崎大の熊谷らは、生食10倍希釈の注射液及び、対照として生食のみのネブライザーを犬に対して行い、一般状態、血液検査結果、剖検所見等について報告した。その結果前二者では異常が認められなかったが、剖検では気道や肺組織にかなりの変化を起す場合が多いようであった。諸条件の検討など更に研究が進められて行くとのことであった。

独協医大の井上らの報告は、ネブライザーによるブロンカスマ・ベルナの投与によっても、Fibronectin やT細胞は有意の増加を来とし、臨床症状や他覚所見も改善することを報告した。

神戸大学の前田らは、鼻アレルギーや慢性副鼻腔炎症例に使用して、臨床症状や他覚的所見が有意に改善していることを報告した。

このようにブロンカスマ・ベルナを用いてのネブライザー療法が、注射と同様、或はそれ以上の効果を示すことが、評価方法は多少の差はあるが、3人全員から報告された。それではどのような理由でネブライザーが用いられたのであろうか。注射は疼痛を伴い、ネブライザー療法はあまり苦痛はないというだけの理由なのか。名市大馬場教授の、局所療法の際の臨床薬理をどう考えるかという指摘は、誰もが知りたいと思っている点であった。局所に於ける抗体産生の増加の可能性なども馬場教授は示唆されたが、井上らの報告でも述べられたように、血清成分やリンパ球の有意の変化は、単に局所に於ける作用以外のことも考えさせる。ネブライザーは毎分2ml程度で使用されていることが多いが、この量はどうなるのか。鼻粘膜から吸収されるのはどの程度か。或はあまり吸収されずに咽頭に流れて嚥下されてしまうのか。また、1回に用いられる3-6mlという量についてはどう考えれば良いのか。吸収されるとすればどういう経路を辿るのか。咽頭に流れるとすれば機械的な洗浄作用はないのか。ネブライザーの使用に当っては、第6回、第7回の研究会でも論ぜられた。投与薬剤の安定性の問題も含めて今後更に研究されるべき点であろう。そういう意味でも宮崎大学の演題は興味があった。剖検でネブライザー吸入を受けた何例かに、ブロンカスマ・ベルナでも生食でも、間質性肺炎が観察されたということは重大である。動物と人体とでは吸入条件が異なるから、同一には論じられないが、若し何らかの不注意によって人体でも起り得るとしたら嚴重な注意を払わねばならない。動物でも気道感染症の治療法としてネブライザーを用いることがあるそうである。この研究が進められて次回研究会でも続報が発表されることを期待している。